マスコミ

歴史からメディアの諸課題を考える

SNSや「フェイクニュース」が席巻する現代社会

鈴木雄雅

原稿を書いている十二月上旬、トランプ米国大統領は敗北を認めていない。その彼が「分断」という語を米国内ばかりかグローバルに広めたとは言い切れないまでも、「フェイクニュース」という言葉で、メディアと対決する姿勢は常に話題を呼んだ四年間であった。

「民主政治とジャーナリズム」を副題に掲げた渡辺将人『メディアが動かすアメリカ』（ちくま新書）、デヴィッド・E・マロー、『ニューヨークタイムズを守った男』（原題：Truth in Our Times、日暮雅通訳、毎日新聞出版）の二冊は大統領（選）を取り巻く米国メディアの光と影を描写している。

後書の著者が長年同紙の法務部門を担当する弁護士というのは異色。報道の自由というよきアメリカの伝統を守るために編集室で起きた弁護士とジャーナリストのやり取りを包み隠さず伝える。

国内に目を向けると、長期政権が崩れ、しかしそれを継承すると公言した自民党・菅政権の誕生後、相変わらず誰のための政治かを疑わらざるを得ない状況である。

望月衣塑子・田原総一朗『嫌われるジャーナリスト』（SB新書）、望月衣塑子＋佐高信『なぜ日本のジャーナリズムは崩壊したのか』（講談社＋α新書）そしてマーティン・ファクラー『フェイクニュース時代を生き抜く データ・リテラシー』（光文社新書）の三冊をとりあげよう。

前二書は思わず手に取りたくなるような書名であるが、東京新聞記者と田原、佐高という名高い論客との対談という形を使するといった民主主義社会の根源となる、ある種お題目を信条のように思うのなら、ジャーナリズム、それを業（なりわい）とするジャーナリストは、権力から嫌われてナンボであろう。逆説的に言えば、嫌われ度が高い程質の高いジャーナリズムに成長するのである。

にもかかわらず、伝統的なメディアが日本社会のみならず、世界でも支持されにくい風潮になっている。それ自体大いに危惧する筆者だが、鴻上尚文・佐藤直樹『同調圧力』（講談社現代新書）がコロナ禍でさらに炙り出された日本社会の息苦しさに迫る。ジャーナリズムとは何かを伝えるには、大学のオンライン講義よりも分かりやすい先の二書である。

ファクラーの書はより一般向けの啓蒙書と言える。「日本のジャーナリズム復活のために」（第6章）とあるものの、誰でもいますぐにできるメディアとの付き合い方、歴史的観点からもメディアのジャーナリズム機能をとらえて説いている。著者がフォローする日本の論客（一五九―六〇頁）やフェイクニュース問題を取り上げる九本の映画紹介も役立つ。

柴山哲也『いま、解読する戦後ジャーナリズム秘史』（ミネルヴァ書房）は、「言論・表現の自由」とジャーナリズムを軸にGHQから小泉ポピュリズム政治までの戦後七〇年を読み解く。

佐藤卓己『メディア論の名著30』（ちくま新書）は歴史学から導き出されたとはいえ、いずれの書も現代社会における、メディア、コミュニケーションをめぐる諸課題を考えるにあたり示唆に富む内容である。またピエール・アルベール『新聞・雑誌の歴史』（斎藤かぐみ訳、白水社・文庫クセジュ）は一見すると書名に「フランス」という文字がないため分かりづらいが、フランスがたどったメディア社会を「ミニ事典的」（訳者あとがきから）ではあるものの、米英に一辺倒の日本ジャーナリズムにとって、メディア史家が残した貴重な書である。

SNSやフェイクニュースが席巻する現代社会。メディアの読者、聴取者・視聴者と呼ばれた受容者がコンテンツを消費する「利用者」にとって代えられつつある。田中辰雄・浜屋敏『ネットは社会を分断しない』（角川新書）のように、安易な悪玉論にデータで疑義を唱える書や、山口真一『正義を振りかざす「極端な人」の正体』（光文社新書）、そして大治朋子『歪んだ正義―「普通の人」がなぜ過激化するのか』（毎日新聞出版）などは、一人ひとりこの時代の変革にどう対峙するか、考えさせる書であろう。（すずき・ゆうが＝上智大学教授・新聞学）